

流動的

《自分が自分ともつれあつてゐるあひだに

自分が流れであることがわかつた》

僕が気づいた時 自分が一本のものではなくて
何本ものもので よぢれて上になり下になり
兩岸には青い山が迫りあつてそびえてゐた
兩岸には楊柳が等間隔になびいてゐた
僕は果てしない時間を追つて行つた
僕は月の光に照らされながら背をふくらませてゐるのであつた
僕の実態が白い流れと思つてゐたのも
月の光のいたづらであつた
夜の明け際には 僕は自分の黄土色に気づきはじめた
兩岸を結んで一本の長い石の橋がかかつてゐた
夜の明け際には橋上の手すりから下をのぞき見る者が現はれた
彼の目に黄土色の僕の姿がうつてゐるのがわかつた
小さい二つの恐怖のまなざしであつた
のぞき見る者といつても彼等は次から次とその目を変へた
僕は彼等すべてに僕の姿の少しばかりの変化を示したが
僕には彼等が同一の反応を示したにすぎないのがわかつた
ある者は馬上から斜めに一瞬のあひだ僕を見つめた
白い虹立つ山のはざまの彼方を目指して
彼等はそれぞれに旅立つ者であつた
弓を背に 貧しい衣服に 赤や黄の思ひ思ひの飾りをつけて
誇らしげに 騎馬の者も 徒歩の者も 立ちのぼる砂塵を残した
彼等と直角に僕は自分のうねりを見せてゐた
僕はしばらくのあひだ橋の下で
何度も廻流して彼等の行く末を見やつた
それから 僕は僕の流れを自分なりに流れはじめた
兩岸の楊柳が等間隔になびいてゐた
日光にさらさらと音立ててその葉が銀細工のやうにかがやいて散つた
突然片方の山が見事に青くそびえ立つた
背後には青い空が無限につづいてゐる
僕の自我がほれぼれと自我の没入をそちらに計る
片方の山はゑぐられたやうに暗黒の影を落した
僕の自我があはてふためいてのたうちはじめる
夜になるのが近づく頃には僕は橋上の出来事を思ひ出した
《自分が自分ともつれあつてゐるあひだに
自分が流れであることがわかつた》
僕は自分を失ひはじめて夜をむかへる

しかし 僕は知つてゐた
その頃 旅立つた者たちが おそらくは囲みの中で
血まみれで 僕を望み見てゐるのを
僕は月の光に照らされながら背をふくらませてゐるのであつた